

「おさしづ」第4巻における「本席・家族」と「道」

『おさしづ改修版』第4巻(明治29～32年)の「本席・家族」に関する「おさしづ」における「道」の用例を整理する。「本席・家族」として、ここでは長男政甚に関するもの(3件)を含めているが、ほとんどが飯降伊蔵本席の身上伺である。第4巻には「本席・家族」の「おさしづ」が21件ある。これは、年平均にするとわずかに4件である。第1巻の年平均22.5件、第2巻の同23件、第3巻の同23件と比べると、第4巻になって急に少なくなっていることが分かる。

前回の連載(2019年1月号)では、刻限の「おさしづ」が少なくなっていることを指摘し、「何ぼ刻限にて知らせど、刻限はいずれ〜やると追い延ばすばかりや。そこで俄かの事情、身上のさしづでなけりゃ論されん。」(さ30・1・13 村田かじ身上願)という「おさしづ」を引用した。本席身上伺は刻限と同様の意義のものとして説かれている。「刻限論したいなれど、どうも論す事出けんとは、前々論したる。……これまで重き者の身上にも知らしてある〜。」(さ32・6・19 本席三四日前頭痛にて痰つかえ御休みに付御願)とあるように、本席身上伺や刻限で伝えられるべき内容が、この時期になると個人の身上や事情に対して説かれるようになっていいると考えられる。

第4巻にある21件の「本席・家族」の「おさしづ」のうち、「道」が用いられるのは11件、3回以上「道」が用いられるのは5件である。以下で、その用例を確認する。

毎々論したる道(艱難苦労という道)

上記のとおり、「道」の用いられる件数は多くないが、そのなかで印象に残った用例は次のものである。

身上障る処、毎々論したる道という。いつ〜まで同じ事と思う。心間違うて〜、それ聞き分け。(さ30・6・22 本席四五日以前歯痛みに付願)

「毎々論したる道」と言われる。それを、またいつもと同じことだと思って、受け取り方を間違えてはいけぬ。その「道」をよく聞き分けるように論される。具体的には次の「おさしづ」がある。

艱難苦労という道は、毎夜々々話したる。道の上から見れば、今日の日と言え、何処からどんな事言おうが、皆世界に力がある。危ない怖わいという処、連れて通りたる。(さ31・7・14 昨朝本席御身上御願ひ申し上げば、夜深に尋ね出よとの仰せに付願)

ここでは、「艱難苦労という道は、毎夜々々話したる」と言われる。このように、いつも論し、話している「道」があると言われている。その内容はどのようなものか。「艱難苦労という道」である。この「おさしづ」には、次のお言葉が続いている。

元を聞き分けてくれる者が無い。そこで十年口説き話をする。話をすれば、心に感じて治めてくれるやろ。よう聞き分け。つとめ一条は出けず、かんろうだも、世界分からんから取り払われた。あれでもう仕舞やと言うた日もあった。世界どんな事あつても、付け掛けた道は、付けずに置かん。……若き神と言うた。十年の間若き神という。この者一つ順序の理、成らず〜の間、順序を論すは、この元台というは一寸には論せん。痛めてなりとかづめてなりと。名は秀司という。この艱難もよう聞き分けてくれにやなら

ん。若き神、名はこかん。……順序の道伝うてくれ。これはどういいう話であつたか。分かって知って居る者は知って居るだけ。知らん者に聞かしてやってくれ。(前掲)

この時期、「順序」という言葉が頻繁に用いられているが(『天理教事典 第三版』の項目「順序」参照)、ここでも「順序の道」と言われる。おつとめは止められ、かんろうだも取り払われ「あれでもう仕舞やと言うた日もあった」、また、「名は秀司という」「若き神、名はこかん」と名をあげて、その苦勞艱難の歩みがあつて、今があるという順序を聞き分けるように、また、知らぬ者には伝えるように説かれている。

この道

いつも論されているという「道」は、しばしば、「この道」とも表現される。

「この道というだん〜の道である程に。今日の一時勢力よいといえど、元はあちらへ逃げ、こちらへ逃げ、細い〜茨路から成り立ったものである。所々の治め方よう聞き分け。小さいものが小さいと言えん。大きいものが大きいと言えようまい。古き道より見分けてくれ。」(前掲、さ32・6・19 本席三四日前頭痛にて痰つかえ御休みに付御願)

この用例は、先にあげた艱難のなかを通り抜けてきて今があるという「道」の論しとよく似た意味のものである。ここでは、これまでの艱難のことを「細い〜茨路」や「古き道」、そうしたなかから徐々に成り立ってきたということ。「だん〜の道」と言われ、そうして進めている歩み全体を「この道」という言葉で示唆されている。

次にあげる「おさしづ」も似たものであるが、「順序」とは、単に艱難な過去があつて今があるという経過を指すだけのものではないことが窺える。

「この道の理聞き分けて、早く順序治めてくれにやならん。この道にどういいう事ありたて、危ない道、どうしたらよからう、越すに越されん道ありたて、案じにやならんような道、神が連れて通りゃこそ通れる。神の道に疑いは無い。」(さ31・12・30 本席御膳御あがりの節身上せまり御話)

ここで説かれるのは、「この道」を通るにあたって心に治めるべき物事の順序、序列である。神が連れて通るからこそ、「危ない道」も「越すに越されん道」も通り抜けることができると説かれる。そのほか、「この道」の通り方について、「この道は強いもん勝ちではいかんで。」(さ31・10・23 本席御身上願)、
「幾名それ〜、何名の中といえども、この道はたゞ一つの道でありて、道に二つの理は無い。」(さ32・3・5 本席一年程以前より左の耳聞え難くいと仰せられしに付願)などと論されている。

このように第4巻においては、「毎々論したる道」や「この道」と言われて、「道」という言葉が、教祖の時代から続く一連の歩みを指すものとして、すっかり定着した感がある。今日の道(第4巻当時)の状況を考えると、どこからどんなことを言ってきたても万事対応できる力をもってきている。それは、これまで危ない、こわいという道中を連れて通ってきているからである。この元をよく聞き分けてもらいたいと説かれている。